

学童保育施設と地域の遊び場の設計

1200130 丸山 和暉

指導教員 吉田 晋・重山 陽一郎

高知工科大学 システム工学群 建築・都市デザイン専攻

1. 背景と目的

1-1 背景 - 学童保育施設の概要

学童保育施設（以下学童とする）とは、「保護者が労働等により昼間家庭にいない小学校等に通う子どもたちに、遊びや生活の場を提供し、その健全な育成を図る事業」であり児童の「家庭に代わる生活の場」とされている。

女性の社会進出増加もあり、学童は業務として扱われ始めた1998年から現在まで増加傾向にある。

1-2 目的 - 学校敷地外に学童を設計

学童の増加にあたり、学童保育の実施場所は全体の半数以上が小学校敷地内の専用施設や小学校校舎内の余り教室といった学校敷地内で行われている。学校敷地内の学童に通う児童は下校をしないことから下校時に学校に取り残される疎外感を感じたり、いつも学校にいて学校生活との切り替えができず、さらに遊び場が学校敷地内のみに制限されてしまう。そのような学童が「家庭に代わる生活の場」となりうるのか疑問を感じた。

本設計では、学童の設計敷地を学校敷地外に設定する。そこで学校から学童までの通学を通して児童が遊べる空間の提案と児童が毎日楽しく遊べる家庭に代わる学童の設計を目的とする。

2. 対象敷地

対象敷地は高知県香美市土佐山田町宝町3丁目2-12とする。（図1）

対象敷地は南北方向に約35m、東西方向に約50mの広さである。また南側が6m道路、西側が7m道路に面しており、北側・東側が敷地境界線になっている。

対象敷地は現在、香美市立山田小学校の学童（めだか・くじら学童クラブ）が事業を営んでおり、来年度から山田小学校敷地内に移転を予定しているが新築として本設計を考える。



図1. 山田小学校、対象敷地周辺地図

（国土院の電子地形図に対象敷地を追記して掲載）

3. 設計方針

3-1 通学路の遊び場の提案

学校から学童までの通学路の中で学童に通わない友達と遊び、地域の人々と交流することで放課後の自由な時間の認識を強く感じることができると考える。よって通学路の遊び場の提案では、子供たちが通学中寄り道をして遊ぶシーンに必要であれば小さな設計物を設け提案する。

3-2 学童の設計

現在事業を営んでいる山田小学校の学童の児童数約100人、指導員数約10人、アルバイト数約4人の規模を用い設計を行う。

まず配置計画として、ドッジボールなどをする大きな庭は伸び伸びと遊ぶため南側と西側の大きな道路から離れた北東の位置に考える。学童専用の園庭を大きくとれる利点をいかし、室内と屋外の多様な空間のつながり方を考え、児童の動的な遊びを回遊性、連続性によって誘発する。また、レベル差を設けることで動的空間と静的空間を区別する。地域に対しては直接子供達が見えなくとも、子供達の遊び声などが伝わるように設計する。

4. 設計

4-1 通学路の遊び場の提案

通学路の遊び場の提案では、実際に山田小学校周辺を歩き、子供たちの遊びを誘発するような空間を提案する。

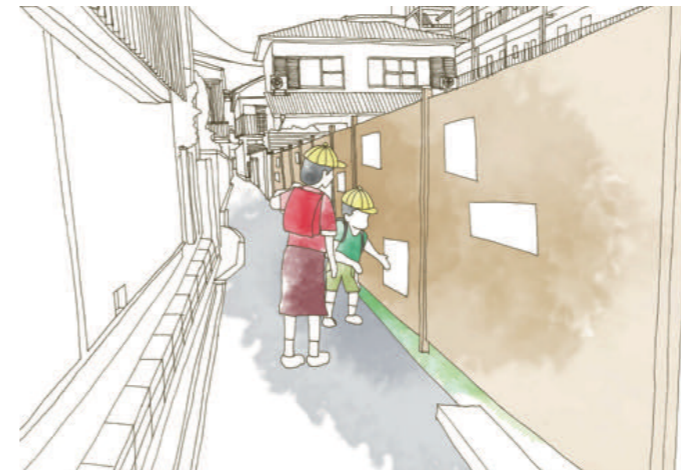


図2. 学校で書いた絵やテストを貼る



図3. 通学路で見つけた物を溜める

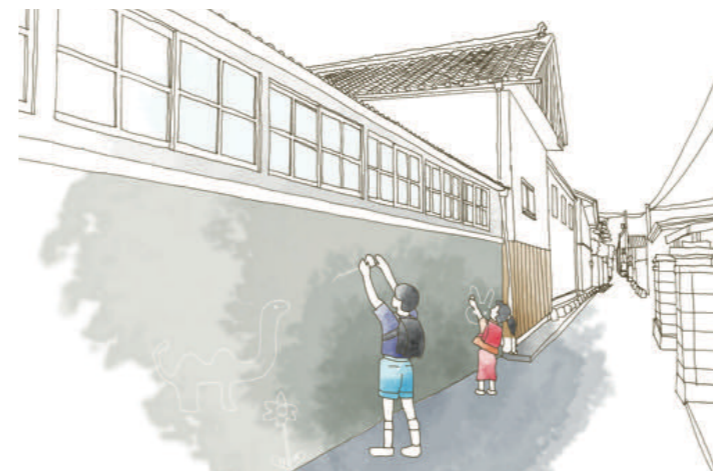


図4. 壁に落書きをする



図5. 穴のあいた側溝に石を入れる



図6. ベンチで座って話す



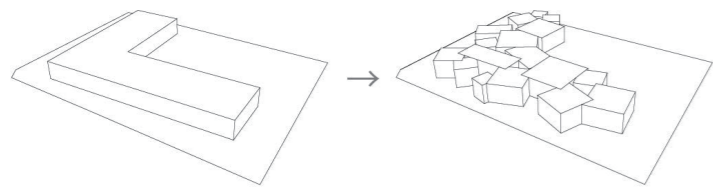
図7. 路地の入り口をサッカーゴールにする

4-2 学童の設計

4-2-1 ダイアグラム

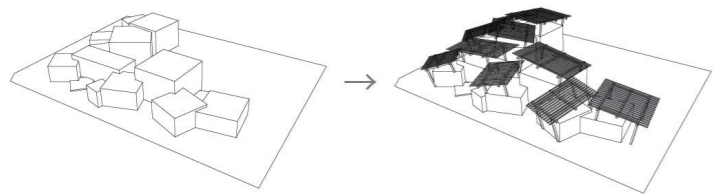
はじめに配置計画として、子供たちが周りの目を気にせず遊ぶように大きい庭は道路から離すことを前提として考えた。また建物の周りを回遊できるように建物自体も道路から距離を置く。

次にグリッド角度の異なる単位空間の集合にすることで建物の表面積を増やし屋内空間と屋外空間が深く関わるようにする。また光を取り入れるため建物高さを調節し、その上を勾配屋根が覆う屋上庭園を設ける。



1. 大きい運動場を道路から
囲うように建て物を配置

2. 単位空間の集合による隙間
は外と中を多様につなぐ



3. 光を取り入れるため建物
に高低差を設ける

4. 屋上空間に様々な影を
落とす屋根を設ける

図8. ダイアグラム

4-2-2 動的空間と静的空間

動的空間に関しては、単位空間の集合で構成されているため教室やデッキの繋がりによって回遊性が生まれる平面計画となっている。図9にあるように小さい回遊路を多く設計することで8の字で回遊したりなど子供は様々な回遊の仕方が可能になる。また土間スペースを建物周りに設けることで裸足でも屋上庭園へアクセスできるなどの連続性が生まれる。動的空間では鬼ごっこやかくれんぼ、警泥など動的な遊びが行われる。

静的空間は図9のような溜まる空間が生まれるように各部屋の接触場所を決定した。静的空間では読書、勉強などが行われる。

1階の動的空間は、同レベルの連続で構成されており、静的空間は動的空間より高いレベルに存在する。

4-2-3 隙間で起こるアクティビティ

グリッドの異なる単位空間の集合にすることで建物周りに様々な隙間が生まれる。その隙間1つに対して開口部が1つ以上設けられており、その開口部によって屋内空間と屋外空間で見る見られる関係を生み出す。また土間上の隙間では、雨上がりに水溜りで遊ぶなどのアクティビティが生まれる。

4-2-4 地域に対する学童の賑わい

図9のように、敷地外から大きな庭までの視線の抜けをいくつも設けることで、学童の賑わいがいくつもの壁を通して緩やかに地域へ広がる。

4-2-5 屋上庭園

高さの異なった屋上を庭園化することによって、3次元的な子供の動きを可能にする。

図10にあるように色分けされた3つの屋上庭園へアクセスできる。また地上の庭と屋上庭園で見下ろす見上げる関係が生まれることで地上にいる子が屋上に行きたくなるなど子供たちの活発な動きを誘発する。

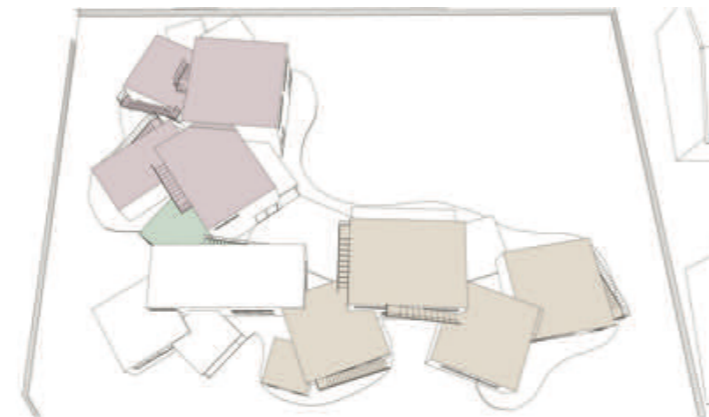


図10. 屋上庭園ダイアグラム

5. まとめ

通学路の提案は地域の隙間などを有効活用し楽しく遊べ、学童の設計も同様に隙間を設けることで様々なアクティビティを誘発する毎日楽しく遊べる学童が設計できたと考える。

6. 参考文献

『放課後児童クラブガイドラインについて』厚生労働省
『1学童保育とはどんな施設(事業)か』厚生労働省

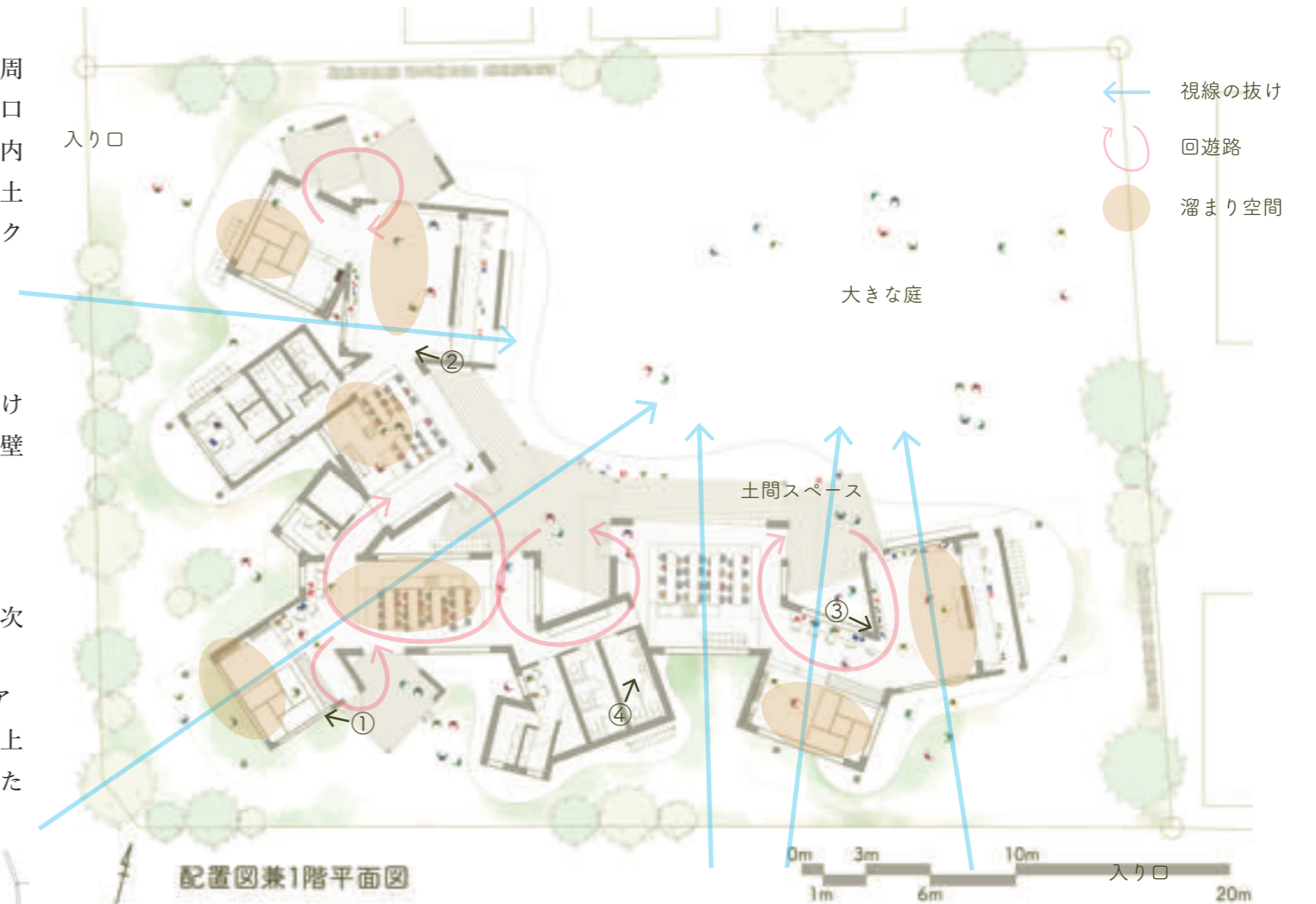


図9. 配置図兼1階平面図



図11. 静的空間の様子(①)

静的空間では本を読んだり勉強を行うなどの静的な動作が行われる。



図12. 屋内と屋外の関わり(②)

鬼ごっこやかくれんぼで鬼から隠れるときに隙間では見る見られる関係が生まれる。



図13. 屋上庭園から水溜りを見る(③)

雨上がりに庭はぬかるんでいても、土間上の水溜りでは泥のつく心配がなく水遊びができる。



図14. 屋上庭園の様子(④)

屋上庭園には、屋外と屋内からのアクセスが可能である。また屋上庭園上でも見下ろす見上げる関係が成り立つ。